序
例言
卒倒之類

寛政元年開鐫

廣惠濟急方

躋壽館藏版

序

濟急方刻成安元謂余曰此是

先大君仁民之一事獨序此書者非足

下不可余駭而問故乃徐語余曰距

今十數年矣

先大君一日召臣而問曰仄聞民間疾

疫方其急遽之際無邉請醫或僻遠
乏醫雖請途遥或夜間若阻事而不
來遂至不可救者往往而有是可憫
矣豈無有救急之方可以備不虞者
歟臣不敢妄對退而思之蓋救濟方
法非無其書但山野小民亦能可蓄

可辨其可以嘗

上旨者未之有也於是日夜渉獵諸

方書隨得而抄錄夷蠻之奇與夫俗

間所傳亦皆采擇不遺裒而成卷因

施諸行事而歷試其功驗亦有年所

已五更其稿而未成書爾後

先大君燕聞時召侍醫而問民間疾疫
元悳亦在末財五内爲之如燬痛思
奉職無狀而無副仁民之
台慮憤悶將疾矣既而
先大君溘捐萬民元悳慟哭不能起者
數日矣然日夜督兒元簡等就事竟

至今春而書始脫稿焉足下久陪侍
惟幄而與聞其
明命矣是故敢需一言焉爾義行受
而未開卷愀然酸鼻亦將慟矣於乎
先大君深仁廣德無得而稱哉安元能
體

上旨而盡力其職永輔其仁於下焉
誰不嘉賞乎余雖不敏豈可不文爲
解蔽其忠誠哉乃錄其語以爲之序
若夫其書之精選何竢余言四海之
民得之則安不得則苦譬之非大旱
之膏雨則中流一壺雖欲不貴得乎

欲使山野小民常讀而熟知故俾語

以國字云安元其氏多紀令嗣字安

長亦爲通家久矣

寛政紀元歳次己酉十一月冬至日

肥前守從五位下佐野義行撰

それ治世の世平安の都小事まで堅る
ひろきをはかりてきくは神代より
しるく醫療乃みち今につたはりて
の治まる百藥もあまくすかりまへと
乃そくみなしへのことに志小西えなき
生民の命をいのちして人を仁愛乃體
とは前し要ふまるへし安乱の比
東乃御めぐみ厚く広くて結ひぬる

里民乃やまひおほからんことをうれへ給ひて
撰述のそ化なさせんとおぼしめされ
ことさらにつ孫子侍醫をめしては啓める
言給く多おもよにをとかりて志との方あ撰
方をとせりせ給ふその飛様と乃名号の
春日多紀元悳小御下されしとて撰述
有り急症のほうつきさに乃そみを醫を
ちふまあく喜地けむりゑらし 書

僻遠きある里は〓〓しるあまりて窮
巷なとにいかなるとも〓へき術なきを志らは
いまてはらふいのちはおさめゆくひもす
くすのうち此頃時よりいつれも用ひ
きとくふるき経験乃方を集し目録く
さはく拙まらしう純くもとよさし
まあゐに元乃里つくしてかをあらむ
遠此そのもとの留もからぬをおもひ

めくらしはしのまゝ数なる我おもしろく
あはれしめんとはとも絲のふさきなり
あまたはなえてよむ神乃家ゝにつゝ娘ら
やとろへとよひとゝもしはゝえせとの
國乃てとよとも家とくもとも見ぬ深くあいめ
すゝれ娘の我おもむ華をあはと娘さて
書家の娘其よ天明七年乃春にかん
名つきて滄急ぶきにふゝとのかりし志載

御めくみとかて[illegible]世乃まつりことなの
始へききことはまの伊をあ川しなまゝ
うあしいのるゝ台り雲切く迷ふまゐいて
此中絶を 御論んまそあへさりしおとく
流血帙り拭くく絃るを小今あらるよ
御世つゝせおりし侮しく切く欺きくも
うらやとの路筋りもてうのく
おろん遮をとせ小あらりて何川なくゐみの

生前とたのみし給ひし此書をと遊り
しめ遣へさよし。命あまりによ慈
民乃御まつりごとをはやりさしおふま
なかぬしれかはしめ　給ふとうけ給はりか
つたへ奉らせ三嶋但馬守政喜か清翰
すなはしめ絵と閲しれハあらはし我
志るしをくへ元乃里の志ふよまりせ二亩
いかみしかさ蘭をちるてとしるかりと

以上

寛政元年秋八月

中埜監物藤原清翰謹識

例言

一凡人疾病あらバ醫師よ療理を請ことも古今の法あして病ハ慎の道なり然れども暴病ゆゑに臨くハ海隅山陬の民ハ勿論通邑大都といへども折あしかれバ醫ハ遠くまらず他醫を引とも至らず此時よ當りてハ智者も謀を設るべき地なく勇者も斷べき處なく白刃も踏こ

爵祿ハ辭すれども此世事ハおほくハ
胸中惑亂して收拾する處なく人世
中あるまじき事ハ俄に起りしがごとく
婦人女子と一般に狼狽周章忠肝孝心
ハ士も亦祈請誠を盡し身を以て代り
てん程に思ふ迄なく病ハ虛實をしらずして
藥劑の避就を辨せず妄りに圓丸艾灸を
施し虛するを瀉し實なるを補ひ遂に

活る死人越して異物となさしむるに至れ療理法にとぼしく死ハ命なり誤藥なく殺ハ横夭なり實に可嘆く故に一服の藥一壯の灸も大なる誤なく生ハ誠萬一に望しきんと欲ハ是此篇の撰ある所以なり

一經傳子史の寶典と以へども讀ざれバ其用尾礫に劣まり本編舊綴ハ漢文を

人にまで今改て國字にやはらげてハ病家の人をして讀で其義を曉さしめんが為なり濟生に志あらん人ハ預熟讀して其大意を解釋し更日常一通を座右におきて急ハ臨て遺忘に備へし豫熟讀して其大意を得られバ事に臨必ず誤ることを多く彼渴して井を穿るが如くなるべし

一凡人疾病ありて療理を施さんとせバ先

其病證を視定べし病證を認るうへに
く鍼灸藥等の相對すべき理法を施す
事なりて古人も百方の藥を探索するは
一病證を認ふ志なれといへど總人の病に
病因病證といふことあり病因とは病の根
本なり草木の根あるがごとし病證とは病
の狀外にあらはれるをいふ草木の枝葉
あるがごとし病內にありといへども其證外

にかゝはらざれバ何れの病たるを知るべからずハ猶草木の秋冬に枯凋て枝葉なきときハ何れの草木なるを志るべからざるがごとし春夏枝葉生に依て其物を識得と一般にして人の病も其證外に見る故何れの病なるを弁別すべきなり此故に斯編各門の首に病證を載て其大略を見し後に方術を擧たり毫髪の見誤ハ人を瞬息

の間に繋ることなれバ最戦兢を加へて忽諸にすべからず

一 通編の諸論皆古人の成説中に於最精覈にして今に試みて符合する者を撰採して毫釐も無稽なる臆説をまじへず方薬ハ古今華夷を論ぜず凡藪澤中の方といへども盡

一 諸家の方書并に本草に照し考へ数試て數驗ある者をもつて病家倉卒の用

に便なる者を撰びて故に其方二三味に過ぎず採索るに易く取得るなり

一病名古今同じからずして且正名あり謬名有り大抵古名を穏當とし次假令卒倒人事を不省の證を後世卒中風と稱す素問などに云る古の書物にハ擊仆と謂七情鬱結して七情とハ憂思喜怒悲驚恐を云昏冒なるを素問に氣厥と以へ至後世これを中氣と許叔微と言る人の本事方と云書に始めて

出(いで)し名(な)也(なり)名(な)づけて中(ちう)とハ外來(ぐわいらい)の邪物(じやぶつ)に中(あたる)を
いふ中風(ちうふう)中毒(ちうどく)の類是なり内(うち)七情(しちじやう)の過(くわ)極(きよく)
よるより發(おこり)たる病(やまひ)を中(ちう)と稱(しよう)するハ謬(あやま)り
なるべし卒(にはか)倒(たふ)れる證(しやう)原(もと)一様(やう)なれバ然る後(のち)
一槩(がい)に卒中風(そつちうふう)といへるも名(な)ハ實(じつ)に當(あた)ら
ざるなり似(に)たり擊(げき)仆(ふ)氣厥(きけつ)の正名(せいめい)ありて
穩當(おんたう)なるにしかざるなり然(しか)れども本(ほん)
編(へん)各門(かくもん)の病名(びやうめい)ハ皆古今(ここん)正謬(せいびう)など論(ろん)ぜバ沿(えん)

習久しく多く世人の聞覚ある者ハ従へり亦唯俗便を取るなり

一 其用を識ざれバ奇藥靈劑も病を治せずに益なし獲難の藥と亦其時に用ひがたき時ハ其能を識ときハ眼前物として良藥ならざるなし且急に臨んで最其用をなすに足る今編中用所の藥品ハ病家倉猝の際探索に便なる物を擇

く獲ごのるし此の品を載せて大抵味噌鹽酢酒或ハ蔬菜魚類其他人家日用此品よく有合なるべき物を撰用すり已ことを得ざるに至りて藥舗鬻所乃物を用ゆ必細書して藥店ふ有るを註し置たり生草木も亦人家園庭中ふ栽ゆる物或ハ道傍原野よ在所乃品を撰用し採摘こと易ふ取たり且地方異すれハ産物殊なり

時移り物亦易此に有て彼に無物なり若
木に縁て魚を求め海に入て玉を索ば
獲難かざるに極る此故に本編中一
病證にして數方を臚列するハ其地方
に就て用ひらるゝ志をんが為なり敢て
博に驚るにハあらず

一凡生草木の形状など本草といへる書に説
ところハ皆他の艸木乃枝葉花實乃能相

似たる物を以て比諭をとれバ多し此編ハ醫家の設なれバ此學に心會なき人よ指示とせるなれバ其比べき草木こと亦識ざる人多く地方異なれバ名も殊なる故今直よ其形像を圖して略其説を載せあり圖ハ春夏秋三時の形状を寫して其態度を志らしむ然れども土地よ沃土瘠土山陵卑濕乃同じからざるあり又陽

地陰地の別ありて其産する所の地に因て
形状色相頗異同あるゝどのありまバ亦必如
此と言べし此に寫所ハ東都の人家
園庭に栽物或ハ近郊に産する所なる物
を採て真寫にせしなれバ恐らくハ関
西或ハ南北方土の地に産する物と違へるも
あらんすれバ観者心を用て仔細に辨
最疑しきハ須其師に就く研究すべし

一凡薬物ハ其證に依て效驗を奏すること必しも有毒の故にあらず又必ずしも無毒の故にあるにもあらず其證と對すれバ皆効あり又對せざれバ倶害あり假令磁石よく鍼を引ども芥を拾ことあたハず琥珀よく芥を拾へども鍼を引ことあたハず是等其事を見て解釋すべし物類の相感ずる處すれバ證の合ざる所なり然れども其病

ちを認るをハ老醫といへども誤るまじと
言難し古人乃詩ゐも老醫迷舊疾と言
句あり況病家の人の視定め難きあり
然れバ此編毎用乃藥品可成丈ハ緩劑を
用て峻劑擊劑を用ず假令吐劑も如き
鹽湯韲汁の類を用て瓜蒂藜蘆乃類を
用ず是如何なれバ若誤用ありしとも緩劑
ハ害をなすとも亦緩なるものなれバ遲しといへども

醫師來らバ手段もあるべし峻烈の藥に
して誤用バ害も亦きびしかれバ手技
下に死きぬ地に至る凡峻劑を用と
不用とハ醫師の手眼にあることなる故手
眼なき郷鄙の人に峻藥を授用しむるハ
暗室中に集會して一人劔を拔く舞が
ごとく人を傷ざるとい幾希なるべし
一凡病の見る證ちよと見受たる所ハ同樣

なるに似て虚實ハ同じからざる數あり寒熱乃遁に違る者あり若混殽するときハ利害釐毫の間にあり仔細に辨別せずんバあるべからず此故に醫家にハ診法多端なれども取り其法病人の顔色眼中の精彩を望聲音を聞病情を問脈乃至數動靜を切且胃腹背脊より四末を摸索めて邪物乃有無を責其他種〻の診法をもつて彼

此参伍く異同互に證し其隠微なる域を搜く何れの病と決斷するをもつて對病證の中に真寒假熱假寒真熱とて似く非なるものありて良醫も失診することをひの是然るに今醫事に志さざる人にして紙上の說に依其證を辨ぜんと欲望ハ最得がたければ必せり本編聊醫事の大體を失ざるに似たりといへども其診法を悉

盡ㇾ能ハず是故に醫師來らざれバ速に
委付く此編の論説に拘泥べからず
一脈ハ醫家四診の一にして病を視定るに
ハ六箇ちがふ所あり然るに晋乃王叔
和と云人心中明かし易く指下ハ了にし
難しと言り心を潜思覃して習熟
せざれバ得難きざれバなり唐の孫
思邈とも云人も脈ハ醫れ大業也と云ふも

きりぬべし熟る哉今病家の人に曉し
免んとせるハ絶くすゝざれ事に極まり
故に編中脈法をも言及さゞれ
一凡灸穴を取の法諸書に載る所の説を参考
して古を準とし今を酌て正穴を得せし
め且捷径にして病家の人の極く曉し
易き法を採て挙とされども二ぬごつ
全く得がたし故に今紙上の文字に就く

正穴を得べき法を取るに捷法ありといへども口授なくしてハ當らざるの法を載ず

一凡孔穴を點して灸するの法其人立て點したるハ立て灸し坐して點したるハ坐して灸すべし臥て點したるも同じ總て人の皮膚筋骨ともに坐臥に隨ひ申縮ある者なれバ坐臥に依て體たがひ穴所も亦たがふゆへ肥りこれに由て舊灸の痕あり

ども若卒倒して側臥或ハ偃臥さバ灸痕自
ゆがむ事あらんされバ改て正穴に點して
灸すべし編中灸穴の圖説を載といへども
言ハ意を盡さゞれバ少く齟齬するに似た
事もあらんなれど此意をもつて斟酌して其
穴を取んにハ大なる誤なかるべし庶幾の
る應し

一凡醫方ハ原を考究むるも亦一大業と言

一へし近來諸家編集の方書披閲するに往々謬誤あり況管見蠡識ゆへして倉卒に論定はべきにあらず且此編撰用する所の者ハ一方といへども必諸家の方書に参て同異を攷最歴試乃方中ニ於て病家所用に便宜とれを採まり故ニ姑く救急易方危證簡便驗方等の例に從て方の出所を附載せず

例言畢

廣恵濟急方上巻目録

卒倒之類　人俄にたをるゝ癡の類ひ等を集む

廣惠濟急方上巻

法眼侍醫多紀安元丹波元悳編輯

男安長元簡　挍

卒倒之類

人卒にたをるゝ病の類をこゝに載

中風

閉脱の二証あり閉ハ實証なり脱ハ虚証なり

閉證病狀 人卒に倒奄忽人をしらず歯をくひしめ拳を握り痰潮ごとく喘息し眼口ゆがみ半身かなはずて眼を見はめ或上竄するハ中風の閉證

なる者是也
凡卒倒して口ひらき手撒眼ハ合大便又ハ小
便をもらし鼻聲鼾のめぐるハ脱證にて虚
候なれバ別に療法あり後條に載より實證にも
目瞑大小便ながるゝ者ありといへども其口
噤手を握るを以て實候とす虚候ハ口と手も
ともに開く是其證候ハおのづから同じからざ
る所なり若視あやまつときハ療法も亦大に

誤る心を用ひて診すべし

療法 卒然昏倒さバ先扶して煖かる室ヱ入て嚏を出す法を用ゆ可し其方ハ皂莢細辛等分末となし又ハ天南星半夏四味共ヱ薬舗の末を鼻の孔内へ吹入る可し右しなかれときハ胡椒乃粉を吹入てよし急ヱ胡椒もなくて煙艸の粉を吹入てもよし右薬末鼻孔内へ吹入て亟ヱ顖髮を提げてひき起す可し其時嚏出るときは起志

るしなり奥州邊にあくちよぼくと云木なり此木の葉を採て嗅バよく嚏出る其地方の人ハ此を可用

右の薬ハ筆の管様乃竹六七寸許に切り其端を火に削り薬末を抄て病人の鼻孔の中程へ吹込べし余り奥へ吹入るれハ却て嚏出難るなり又紙を引裂紙撚を作り此端へ右の末を傳て鼻孔へよき程に入るも亦よし

次に手の大指の爪にて病人の人中の穴を志つ

と掐付爪あと見付程よしそよし 人中の穴後に図有り考べし
又急に病人の両手両足共上より先の方までか
でおろし可し右のごとく撫おろし共よしと
云痰氣を散ずる一助なり○又火のよくおこり
たる火盆の中へ醋一杯を傾入醋の氣を病人の
鼻の中へ入る様にして嗅すべし良久して醒 此法
中風に限らず一切卒倒の閉証に用てよし

痰壅不省ハ熨薬

共をしくし葱白細に切たるを

三合小麥麩三合擣を用ゐ（るもよし）鹽二合よく和匂貳包みつけ炒熱して絹にても木綿にても包み病人の臍のうへを熨べし

痰壅不省服藥 生姜汁を白湯に攪用ゐべし白礬薬店にあり加へ服さしめて最良○又方童便と生姜の汁を等分にしませ服しめてよし○又方竹瀝 淡竹を長サ一尺許に截二つに割火の上に架炙で截口より汁出るそのおり其汁を茶碗様の物に承取り用ゐ是を竹瀝といふ淡竹なれを多く灌ぎのとれハ呉竹にてもくへ用ゐ亦し

まぜて良し○又方香油に薑汁を沖攪用ゆ又よし
○又方天南星 木香(店にあり) 二味共に薬剉く等分水に
煎じ用ゆべし○又方皂莢(薬店にあり図説後に出) 蘿蔔子等
分剉て煎じ服せば痰を吐

口噤ば開薬を灌法

凡人の牙歯ハほくハ上歯と
下歯くひちがひゐる者あり其くひちが
ひゐる所へ新しき烟管の吹口(若新しき烟管なきときハ烟管の
吹口の様なる物を用ゆ)を差し込介保人の口ゟ薬をふく

こて其吹口の管よりふき込飲しむべし○又法病人の鼻の孔ゟ急竹の管をさし込此管筆のごとく揉の紙よしより薬を吹込べし○又法鼻をしかと撮めバ息止りて口自らひらくものあり軽き症にハ此法よし

又法 介保人をして口噤さる病人の口開かせ薬をのませんとあらバ介保人の左乃大指と中指とを以て病人の歯のもとへとまりれ不然歯なく空なる所をしかと按定バ歯自らひらく此時右の手にて薬を灌のましべし凡人乃歯のもとへとまりも大抵両方とも歯一枚許づゝあきて空所ありその空

中指

大指

後の法と違あれども此処の手法皆同じ

手ハ介保人のばかり

なる處を大指と中指の爪を入てよく按バ自ら開くものなり

又法　先病人を扶起し背後へまはり両手四本の指をのべ病人の顋をしつかと押へ人差指を下唇の承漿の處へあて押さげながら兩手の大指ゆるく病人の齒乃きへ止りれ空なる處を力を極て緊しくおすべし齒自ら開く病人の頭ハ後ろへ所よはりとしたる物或ハ介保人の胸ヶ膝へ頭をあてうごかぬ様にして置べし

又開口噤揩齒方 白梅の肉を以て牙関を揩こと數遍すべし 白礬を加よく和て擦付てよし○又方 天南星の末五分 龍脳 薬店にあり 少し入研和中指の頭へ蘸噤る齒を揩こと數次して口自ひらくものなり

又開口噤薫方 巴豆を研爛紙に包壓て油を其紙ようつし取て此紙ゐて撚を作り火を点て吹滅し其烟病人の鼻の中又ハ口中へ入薫て涎を多

出すべし　凡口ひらきて薬を灌のませざるハ病人の喉より胸迄響あるべし

灸法　病人の咽中痰聲ありて鋸を曳ごとくなるハ湯も薬もおさまらざるものなり氣海關元に灸すべし多く灸するをよしとす○口噤て不開ハ聽會頰車に灸すべし又人中頰車百會承漿合谷翳風最よし○凡卒中涎塞不省ハ隱白百會人中絶骨章門風市氣海三里地倉大椎皆灸すべし諸穴後に圖あり風市の穴ハ脚氣に出ス○又何れにても臍中へ

塩を填てうへに灸する事三百壮許なるべし或ハ炒たる塩を臍の中へ実しめ置てうへに生姜一毎ぎ厚く片たるを置て灸するもよし又山椒を臍内へ填しめ並てうへに灸するもよしいづれも百壮以上灸してよし

百會

百會の穴ハ頭上にあり此穴を挨には先髮乃際を定べし其法稲稈にて大椎より（大椎ハ頂乃脊骨乃大きなる骨なり）眉の心までの間を量此稲稈を十八に折て尺八すと定此稲稈の端を眉心に當夫より後の方へまはし眉心より三寸を前の髮乃際として假点を付此点より五寸五分に

点まへし是百會の穴也

此処豆許の凹あり此穴を取よハ面を正直にしてとるべし

項頸ハ屈伸ある処なれバ若うつむくときハ項のひて寸尺もまさ修なる故正穴を求がたし且稲稈を肉に貼て取るべし

眉心より前髪際迄三寸後髪際より大椎まで三寸也六寸に前後髪際の間壹尺二寸あハせて一尺八寸なり

眉心

此処に假点をすべし

眉心とハ此処なり両眉の最中を云此処又假点すべし

百會穴是也

此骨ハ頭を動してもうごかぬ

大椎骨是也

肩

大椎ハ如此くびを平にしてかされ高と平直なり此骨のうへのとがりに点して量るなり

人中
の穴ハ鼻の下に在鼻柱と唇乃尖さる処との最中に点すべし此ハ小竪に溝あり此中に付べきなり図を考ふべし
唇の尖とは是也
人中の穴是也
鼻柱のとまりとハ是也
側面より見たる図也
是人中の穴也
人中の穴人の質によりて凸き人あり凹める人あり何れにても鼻柱と唇と尖との最中に点すべし

承漿の穴ハ下唇の稜ﾉ下ﾆ在下唇乃最中ﾆ通おきめの処ぞなり図を考べし

此処承漿の穴也

此通也

側面より見たる図也

おれめとハ是也
是承漿の穴也

頬車の穴ハ耳乃ほけ祢と舌下曲たる骨の角の尖りと処最中にて二分許前の方へよせて点すべし是穴なり口を閉ぢ此處に穴あり口を閉ハなし口を開て取べし自試て自得すべし病人も其心を以て正穴を取るべきなり

聴會

の穴ハ耳前ま在耳の前ふ高く起たる肉ありこれを耳珠といふ此耳珠の下の闕たる処の前ま指頭まて按て口を開き空なる処是なり図を考べし

耳也

此処聴會の穴なり按て試むべし

此高く起さる肉の下のくぼ闕たる処の前なり此肉を俗ふ小みゝといふ

翳風

翳風の穴ハ耳の後ニ在耳朶ノ止の通横ニ後の方髪ぎハへ際ニて耳の後ニ圓き骨ノ下廉の陥なる処是なり指頭を以て按バ耳中ニ引く痛是正穴なり

地倉

地倉の穴ハ口吻ノ傍ニ在此穴口吻を去こと四分許ニ点すべし是穴なり扨手ニ他人攙指と大指を以て内外より撮られバ脈ある処正穴なり寸法ハ面の両顴骨の尖と尖との間を蒙みて量七ッニ折七寸と定たる内ノ四分也

隠白（いんぱく）の穴ハ足の大指の内乃方爪のはへぎハの角ニ在
爪角を一分許を離して点すべし

足の内かたより図の如くなるを云

隠白の穴是也

大拇趾（おやかゆび）

内の方

隠白の穴如此爪の角より一分許を離して点すべし

合谷

合谷の穴ハ手の大拇指と人指との間岐に成たる骨の中央に在此穴を取にハ両指の岐より腕の横紋の処まで藁にて量此わらを二ツに折る最中に点す是穴なり

赤白の分かちハ是也

合谷是也

此処に横に紋あり此紋を限とし

圓竹を握たる形状になせバ此穴所にひきくなるを目的とし

此処ひきくなるとハ是なり

此処の肉ハそるくなるなり

凡人ゝ皮膚の色相内外同じからず此処も内外の際故赤き白きの分ちあり此より量べし

氣海

此穴臍の下に在是を挨乃法ハ臍の最中より下横骨の上際までを藁にて度り此藁を五つに折り五寸と定て臍より下一寸五分に点すべし横骨とハ陰毛の中指頭にて按バ横たはりたる骨あり此骨の上際よりとるなり

大椎

大椎の穴ハ脊乃第一上の脊骨の上に在此穴を探にハ此骨の上に小圓骨のあるを項骨と云三ツみゆる者あり二ツみゆる者あり一ツ見ゆる者あり一ツもみえざる者あり扨此骨三ツある人にても頭を動せハ項骨ハ随て動といへども大椎の骨ハ何様に首を動してもうごかぬハ是大椎骨の證据なり

大椎の穴なり

項骨

此骨ハ大椎骨なり

大椎骨ハ脊骨の最上のものなり然して下の脊骨より大なると認べし

章門

ハ脇肋の季れ小肋骨乃端ニ在此穴ハ按ニハ其人側臥さするまゝ下になりたる足を伸し上になりし足を屈まバ肋骨あらわれて見易し初肋骨の季の小肋骨乃端ニ假りに点すべし此点より前の方へ一寸五分ニ点ハ是章門の穴なり○分寸を定るニハ腰乃囲四尺貮寸あまりて按るべし寸法圖説天樞乃條ニあり

三里
此穴を挨みハ先膝の後國乃横紋の頭より外踝乃尖の最上までを藁みく量此藁を十六よ折を尺六寸と定む
扨膝頭の外の方の側よ凹たる処を膝眼と云此所の最中に假よ点を付置て假点より下ゑ右のすゑて三寸の点ハ是穴なり
此処くぼしをより下三寸に点を
三里の穴是也
外踝の尖乃最中迄とハこれ処なり
此処脈あり三里の穴を按バ脈たるうたば按ても脈動ハ三里の正穴よあらず
齊急方巻上　中風　十三

絶骨

此穴を取にハ膝膕横紋頭より外踝の尖上までを量て尺六寸として此寸にて踝を除踝の上際より上の方へ三寸に点を卸し是穴なり
此処を按摸て視れバ図のごとく骨の解めあり其前に在

右灸穴済生に志あらん人ハ常に取覚急卒の用に備べし以下諸穴皆是あり

皂莢

和名さいかち
又さいかし

實の色黒紫なり

刺の圖

葉の圖

此樹極高大なり枝間に刺おほし葉ハ槐乃ごとく夏黄の花を開き実を結莢をなす状圖のごとし莢を薬とす

又猪牙皂莢といふあり状猪の牙乃如くして小なり氣味最厚し此邦になし唐より渡る薬店にあり

猪牙皂莢の圖

脱證病状 凢人卒に倒れ奄忽人をしらず痰潮喘息眼口ゆがみ半身かなはず上前の閉證に比れバ口開眼合手撒り遺尿るを中風の脱證とする也

療法 後の脱陽の條に出す

脱陽 大ニ吐大ニ瀉さる後の陽脱を附ス

病状 卒ニ倒れ無性ニ眠り口を開手をひろげ大便又ハ小便をもらし或ハ汗出て流るがごとく或ハ汗いでず惣身手足とも小温ニ目を合鼻息麁鼾の如く或ハ痰咽ニぜりくといへる音あり或ハ痰の音なく或ハ面赤又ハうす黒く又ハ顔色粧ふごとし是脱陽也

○凡霍亂篤みて吐瀉やまず又ハ夥しく吐瀉し

たる後元気乏しく手足冷あがりひや汗出て陰嚢ちゞみ上り手足搐し面くろく息づかひせはしく或ハ手足の筋引つまり漸々に無性に成ル者あり皆陽脱の候とす

○或ハ常ゝ喘息もちとて短気つよく左の乳の下の動氣つよき人遽に脱陽することおほし又暴瀉後或ハ廁の内或ハ廁より出て卒に倒るゝあり是等皆脱陽なれバ療法皆同じ

療法早速に神闕氣海關元に灸すること二三百壯すべし大劑にして獨参湯を用ゆべし人参貳匁水中茶椀に貳杯入一杯又膻中の穴に灸すべし极隠白百半に煎じ用ゆ
會人中絶骨章門風市等の諸穴六穴此図説ニ灸中風ニ出ス
すべし痰強きは参姜湯人参壹匁生姜壹匁也煎じ様は獨参湯に同じ四支厥冷には参附湯人参一銭附子一銭煎服汗多出ば人参黄芪各をを煎服す或は芪附湯附子黄芪各一匁煎じ服す○
又方桂枝薬店にあり買求べしを両削と好酒にてせんじ

飲しむ可し若桂枝も無きとさハ葱の白根を倶
廿本許を剉ミ好酒にて濃せんじ飲しめてよし
或ハ生姜を擦く一両を倶酒にて煎じ用ゆ又
効あり

吐瀉の後

脱陽の證嘔氣やまず薬も受ざる者あ
り此證にも半夏を炙附子を炙煎じ服すべし嘔
氣やみて後参附湯又汗おほきハ芪附湯の類を
用ゆべし且氣海天樞中脘に多く灸して其上に

塩を炒り紙に幾重も畏く病人の胸腹背中を絶間なく熨べし扨て炒る塩に呉茱萸 薬店にあり買求可し を剉等分にして攪て臍下氣海陰交の次を是又絶ずのすべし或ハ葱の白根を一握ほど索ねてしかとくゝり根と葉とを切捨て其切口を烈火にて燃し熱なる所を病人の臍下に着逆さに上より火熨にて火を盛り熨すべし

神闕の穴ハ臍乃最中に在

氣海 陰交 闗元

の三穴ハ臍の下小腹の中行ニ在
穴を按の法ハ先寸を定べし其法
陰毛の中陰器の上ニ横ニはりたる骨あり此
骨の上際より臍の最中までを藁にて量取此
藁を五ツに折く五寸と定此寸にて臍の最中
より下へ一寸を陰交の穴とし亦一寸五分を
氣海の穴とし亦臍より三寸下を闗元の穴と
また左ニ圖するがごとし

纂めて度る圖也

臍
神闕
一寸
二寸
陰交
氣海
三寸
四寸
關元
五寸
陰毛の中横骨是也

膻中

此穴処ハ両の乳乃最中に在図のごとし
男子ハ知易し
女子ハ乳房大く垂て分別がたし図说を後ニ載る考換て灸すべし

乳之
乳之
膻中此穴是之

婦人の膻中ハ穴を揆るハ嗌乃結喉俗に云の下胸の上乃
最中に一如此状の骨ありて其骨の上に凹処あり此処よ
り下臍の最中までを藁にて量り此藁を十七に折て其七
寸として此寸法を用ゆ右嗌と胸との間凹ある処より下に
六寸ハかるに点すべし是膻中の穴なり

中脘の穴ハ臆前岐骨の下四寸臍上よりも四寸ニ在り岐骨と臍中との間を稾ニて量り八ツニ折りて八寸と定たる寸法の中間ニ点を是穴也岐骨とハ臆の水おちの処

へ如此なる骨乃事なり

岐骨是ゟ

中脘の穴是之

是臍なり臍の孔の最中より量り取べし

天樞

此穴ハ臍の両傍ニ在

此穴を取ニハ先両乃乳の間を藁ニて量り八ニ折て八寸と定め此寸を用て臍の両方へ開こと二寸ほどに点すべし

婦人ハ乳房大く垂て準となしがたし別ニ挨法有り左ニ出せり

婦人の天樞れ穴を挨よハ腰の圍めて取べし其法前ハ臍側ハ監骨乃うへ背ハ十四椎より十六椎までれ間ゐくとく平直なる処ゐて縄をぐるりと引繞ひく剪断此縄を四尺弐寸と定此寸よく臍の最中より両方へ二寸ヅヽ開て点すべし是天樞の穴なり
若婦人腰を見難きときハ中指の頭より腕の約紋までを一尺として此寸を用べし尤病人手にて量るべし
一尺
背ハ十四椎より十六椎迄の間也
腹ハ臍の処にて量るべし
此監骨也
此間二寸
天樞の穴是也

交接昏迷　男子交合の時氣絶するものをいふ又走陽とて交合の時精をもらしやまざるを附たり

病状　男子媾合過度婦人の身の上にて氣絶しぬることありて往々死する者あり

療法　婦人其侭緊と抱住て息を男子の口中ゑ嘘込てやめざるときハ少頃して自省　若其婦人驚て身を開き手を放せバ必死して不可救　省後食塩を炒熱し布か紙に包先氣海　臍下一寸五分囟前にあり　を熨し参附湯　人参附子を文武にて煎じ用　煎じ灌き服しむべし

走陽 久曠の男子又ハ縦慾れ人女子と交合し精泄出て止ざるなり救ざれバこのまゝなれバ死す早く理法を施すへし

療法 其婦人緊と抱定て其陰茎を陰戸より出さず動かさず其侭にて婦人の息を男子の口中へ呵入てやめず且會陰陰嚢と肛門との間の最中なりを指にて緊と捻住て放さゞれバ精自止む其以後亟よかを又童女に命て息を口中へ断ず呵込せ扨て獨

参湯　人参弐匁水を茶碗に二杯入一杯半に煎じ用ゆと灌のませてよし
○婦人氣絶は吹て男子此口中へ吹込にハ口をす
ばめて吹ば冷し此氣出てあしく口をすばめず
に吹込べし假令冬月寒氣にあれ節凍ぶるとも手に
氣吹かけてあたゝむるがごとく呵々と吹べし
○此法方をしらずして婦人驚愕て身を離さ
れと放或ハ心付ずて療理おくれて死を遂る
人あり凡人の妻妾にハ此法方ある事を説話
なせてしらせ置べきことなり多欲なる人
にもあるまじきにいぐるなれバなり○右
交接昏迷と走陽の二症ハ倶に原腎陽に属す
然れども理法不全
故別に表章す

中氣

病状　卒に氣絶しなひ歯をくひしばり目をにらみ流め且手身冷て咽に痰の聲あり

此証大抵中風の閉證と同しけれバ前の中風の方と合せみるべし然ども中風ハ身溫也中氣ハ身冷し脈も又中風ハ浮也中氣ハ沈也

大抵此證の起る家に心氣を労し又ハ大きに怒事あり或ハ怒をこらへ又ハ思案すること

ありて氣の鬱し時に發する證なり元皆七情の過極りたるより起る世に中氣中風を一ツに心會たる人多し初ハ大抵理法も似たる様なれども後に至りてハ大に同じからず

療法 先初に鼻に胡椒の末又ハ烟草の粉を吹込嚏をさせ後に酢を火盆に焼石へ傾け入れて酢の氣を病人に嗅せ且隠白に（図説中風にあり）湧泉に（図説霍乱にあり）の次に灸してよし　生姜の絞り汁を湯にて拌

飲てよし○又方木香（薬店にあり）を多煎じて飲むべし○又方香附子の末を多辰砂（薬店にあり水飛ハ雑物あり薬店にあるは砂利又ハ大々と云もの故新たに研細末となして用をよしとす）五分白湯にて服すべし

痰厥

此條ハ中風痰攣の証と参へ考べし理法も畧同じ

病状　此病ハ中氣と同じ惟初に眩暈ありて卒倒し聲いでず咽に痰の聲ありて潮の湧ごとく咽にせまり歯をくひしめ目放みつぐ息麁し

此證と中風にハ痰の聲あり中氣の證にハ痰乃聲なし

療法　先搐鼻藥方ハ中風に見へたり用て嚔を取べし其次に塩湯に生姜の志ぼり汁を入まて用ゆもよろし竹瀝をかるもよろし　竹瀝取様中風に出ス　又甘草一

味料く濃煎じ多く飲しむべし痰を吐て愈なり
○又方半夏茯苓二味〈生薬店にあり〉等分煎じ服す○又
方白礬〈薬店にあり〉末となし生姜の自然汁にて調へ
服すべし○又方大なる半夏〈薬店にあり〉十四粒皂莢
〈薬店にもあり図説中風に出ス〉一條剉て水二鍾入て一鍾に煎じ
生姜汁を入温め服すべし○又方香油一盞を喉
中へ灌入為し須臾に痰涎を逐出して愈。

中暑 暑に中り[illegible]倒るゝあり

病状頭痛大熱熾身を扣てみるに肌膚烙がごとく大に渇き水を飲とし汗甚しく泄出て漸に無性になるに至るも喘満熱をいやするなり

凡暑気中と称る病に二つあり人暑を避として涼處に露坐又ハ夜臥失覆して陰寒をうけ惣身に陽気暢越ことあたくして病を得るあり古の人是を中暑と云ふ証大抵頭痛悪

寒肢節痠痛心煩汗出ることあり若此證なくして吐瀉腹痛甚しきハ即霍乱なり各療法同しからず此條に記さずハ炎天を侵して往来し又ハ農夫等日中に労役して天熱に中り気を閉塞たるを救方を載たりおよそ云る中暑とハ病因療法適に異なり混合すべからず　暑を避ざるハ固り緩病なり故に此に載ず霍乱ハ急証なりされバ別條に記しおけり

療法　凡天の炎熱に傷られたる人に冷気をあて冷

水等をのましむる事なかれあたゝむれバ必ず死に及炎
熱れ毒外へ漏出る事のさハる由へなり急日
陰の所へ臥しめ途中道傍れ熱土塊を堀り取く
だき病人のむね又ハ臍のあたりに積ゑ置き最中ふ
窩を作りて中へ他人をして多く小便をさせ
て熱気を透しむ可し○又衣類或ハ手拭等れ
物を熱湯にひたし臍或ハ気海の邊を熨し追
追熱湯をそゝぎ上より淋かけて漸々に醒べし若湯な

れときハ道傍なる熱土を掬ひ臍の上に積重ね冷れバ取換へく幾度も熨すべし○又方既に死とみゆるハ新汲水少し鼻の孔へ入て扇にてあふぐべし至極重き病人なりとも日にあたれる地を一尺あまりほりて其中へ水を入て攪し其水を鼻の孔へ入べし少にても惟水をのりハのましむべしのうぞ

服薬 大蒜一大瓣を嚼み水に送り下せ若嚼ことを

ならなんバ水なく研汁を灌ぎ飲しめてよし○又方急に生姜一大塊を嚼爛なし冷水にて送下べし○又方食蓼（食料になる）茎葉共に手に絞煮て其汁を灌飲しむべし○又方大蒜多少によらず研碎道傍の熱土を取り一處に水にて絞さて置上の澄みたる水を灌飲しむべし○又方或ハ肚痛忍ぐたく或ハ行人倒臥て道上にあるに藕を擣汁を取灌下すべし

入井悶冒 井に入て悪き氣に中り昏なり倒るをいふ

春夏の際或ハ夏秋乃省窖中眢井の中皆陰毒の氣あり又山中深谷の間或ハ金銀銅坑の中往〻霧氣蒸騰す若人此氣に中るときハ悶絶する事あり久不省者救ハざれバ死す

凡春夏〻秋の際窖中眢井久しく蓋仕込たる井戸に入らんとする時ハ燈火を入みるべし火消バ毒あり入べからず又鳥の毛をもて内に

投いれたるに直ニ下へ落るハ毒気なし若其毛旋舞て降らざるハ毒気あり入べからず若入ねバならぬ事あらバ酒或ハ醋数升を井にても窖にても四邊の畔へそゝぎかけ少し停て入るべし又醋を熱く沸て右のごとく灑ぎ入るもよしとぞ

療法 若し其気に中らバ速ニ其井中の水を汲ミて其面に洒ぎかけ且其水を飲しめ亦頭及び惣身

灌かけてよし○又方他の井花水を汲て惣身
洒かけ置ばしばらくして醒るなり○又法
急に病人の衣類を解裸体にし扶て湿気ある地
面の土間に偃臥せしめ釅醋或ハ冷水を其面に
噴け湿気ある草薦を厚く覆ひかけ置ば半
時許にして甦るなり○又法先冷水を取て其面
に噀かけ次に雄黄（薬店にあり鶏冠石ハ雄黄の上品なり用てもよし）
末を一二分冷水に白のませてよし此證轉筋め

其上腹痛甚しき者あり男子四人にて病人の手足をとらへて捉住動ぬ様にして天樞と穴

圖説中風の尨ぬ方をとりに灸し生姜を両判よあり

酒にて濃く煎じ頓よのまむべし又衣類みて

し綿絮にても醋みてよく煮て熱くありたると

きみてと足とても轉筋所を濕し愚拇又濃き

塩湯に病人の手足を浸し胸と脇との邉を薰

洗てよし

食厥（食滞して卒に倒るゝなり）

病状　卒に眩暈して仆口噤て手足動ず或ハ手足躁擾満悶く漸に昏冒して無性となる全く中風に閉証のごとくなれども口目ゆがむことなく痰の聲なし扨腹を按しみるに心下をりて下腹空輭にして右に天樞の邊或ハ中脘の次に塊ありこれを按バ顔を顰いたみある様子にみえて兎角に胸の中を苦むといふなり

凡中風中氣等の証にも心下痞滿て邪物ある証なり故に古方に多く吐方を用ひあり此證も心下痞滿有て吐あれバよしと云ども皆閉證なれハなり虚證にも又卒倒する初に心下痞滿者あれども漸々に空輭になり空輭なるに随ひてます〳〵昏冒なる也閉證に痞滿ハ吐ざる内ハ輭ならざれバ物を吐きて後漸々に輭に成空輭になるに随て稍々と氣もたしかに成

○べし若此分別をしらざれバ妄に食厥として理法を施さば其害甚しかるなり故に卒倒の病者なれバ食前食後の時刻をも考へ尚知得がたくハ傍人にも問求めて食後間もなきか又ハ前日にも大食せしことありや否哉聞心下并に中脘天枢二穴ともに（脱陽に出ス）の次をおしてみるに痞滞塊積あらバ食厥と知るべし

療法 急に開噤法（中風の條に出ス）をもつてくちを

開き濃せんじたる塩湯に生姜の絞汁を入ぬる
ま湯にして多くのませなば必ずはくべくに鳥の毛
又ハ紙撚にて咽を探り吐すべし〇又方藍汁か糠
味噌のうハ水をぬるま湯に沸して飲しむべし吐
くことなきあり〇吐て後紫蘇葉煎じ服すべし生姜をも入
煎じ服すも亦可〇又方藿香生薬店にあり陳皮蜜柑乃皮を用べし
九年母の皮亦よし等分煎服すも最よし
二味薬店にもあり
〇此證最鍼刺をよしとす

驚怖卒死ものにをどろきて
めをまはしかり

凡人夕暮又ハ夜中溷に登或ハ郊野へいで或ハ空冷屋室に遊ひ又ハしづかなる所の地に臥忽異形の物をみて口鼻の内へ邪悪乃氣を吸入驀然地に倒れ手足厥冷両手を握り面色青黒或ハ口鼻より清血を流す事あり

凡卒に倒れて無性に成し病人ハ聲を立るを不起者あり惟小児の驚風並に大人の癲癇驚

怖して氣絶するとハ三證は叫聲をあぐる也
是を其證據とし

療法 病人を外へ移し動かすべからず[illegible]時
て親戚衆人圍繞く火を焚き安息香麝香 薬店にあり
の類香ある薬を焼き人々覚少し出るを待て動
かすべし先急に半夏の末を鼻孔中へ管にて吹込
或ハ皂莢 猪牙皂莢よし 薬店にあり無きときハ 常乃皂莢にてもよし 圖説中風にあり
の末両鼻中に吹入るよし

服薬 雄黄(薬店にあり)を姜汁醇酒等分に攪ぜ煎じ沸こと数度にして飲しむべし○又方 麝香五分研て醋一合に和匀てのませてよし○又方 韭汁を取りを口鼻へ灌入る○又方 菖蒲(石菖の根也人家に多く栽るもの也)搗て汁を取りそゝぎ飲しむ○又方 温酒を灌入てよし○又方 醋少許を病人の鼻中へ吹入それうへに水分の穴いだす 図 霍乱には灸する事七壮陰交の穴にあり 図 脱陽に灸する事三壮するべし○又方 辰

砂石の末薬店にあり熊膽鑑定の法積氣暈倒に出ス五分づゝ白湯に
解きまぜ用ゆ辰砂一味にてもよし

霍亂

此病乾濕の二ツあり濕霍亂ハ吐瀉して腹痛甚しきあり乾霍亂ハ吐もせず瀉もせず惟心腹纏繞大に苦悶を云なり何れも危急なる證にて種々の變化一條に載がたし療法も亦變化あり今十中の二三を記すのみ

濕霍亂病状 病發に頭痛痃瘇ある者あり又頭痛痃瘇なく初より先吐して後に瀉者あり先瀉して後に吐するあり吐瀉の前より腹痛甚しきあり吐瀉ありて後に腹痛甚しきあり何れも腹中疞痛まぢるハなし极吐して吐盡まで瀉して瀉

甚すれ或ハ吐瀉ともに甚まず湯も薬も口に入
らず或ハ口乾て水を飲んとし或ハ悪寒甚しく
或ハ熱を發し喘急しく手足共に厥冷戰掉軽き
ハ両脚轉筋重きハ惣身皆筋冷汗出脣舌動かず
漸ゝに昏倦なるなり
療法 忽然心腹疠痛て吐瀉するハ先塩を炒熱し
或ハ熱灰又ハ糠或ハ塩を炒紙に裹心腹并に臍
下気海脊に十一椎十二椎の次と腰を熨べし

めてよし又ハ生姜を擦り汁を絞り去て滓を炒熱し紙に裹て右の所を熨すべし又ハ食蓼（食料にするたでなり）を多くあつき湯の中へ揉入て腰湯をさせるがよしといへ

服薬　胡椒十四五粒嚼て白湯にて飲み下すべし又ハ研て菉豆等分に加へ煎じ服せ○又方呉茱萸乾姜二味等分に煎じ服さしむ（二味共に薬店にあり）○又方扁豆香薷（二味薬店にあり）各等分水にて煎じ服すべし

嘔吐并ニ乾嘔不已ハ半夏薬店にあり一味煎じ生姜の絞り汁を入服を前の呉茱萸乾姜の二味もよし且中脘に灸すべし中脘の穴図ハ中風にあり間使の穴図説ハ後にあり小灸するもよろし○又方小蒜図説下巻諸物入耳にあり煮て汁を服し臍中に七壮灸す○又方手足冷るハ生半夏一匁生附子一匁二味薬店にあり生姜三片水二杯を一杯半に煎じ用ゆ○又方芥子擣て末となし糊にまぜ紙に攤臍中に貼べし○吐不已ハ巨

闕の穴に灸すべし噦やまざるハ大陵の穴に灸すべし 下に図あり 二穴共に図 熨茱の方ハ前におなじ

下利不已ハ天樞并ニ大都に灸すべし 二穴とも に図後に あり 吐下止ず手足厥冷元気ぬけて冷汗出て煩悶してとの云ずれらぬぞ無性になる人とすることハ参附湯 人参一匁附子一匁 等分煎じ服す 又 姜附湯 乾姜壹匁附子壹匁煎じ服す 又ハ附子ちと煎じ塩一撮ちと入まぜ攪て服すべし○又方桂枝あり茱店に壹両剉て好酒に煎じ服す

○又方連鬚葱白七茎酒にて濃煎じ服をし或ハ白

丸薬店にあり一匁沸湯に拌用ゆ○気海 図説中風の條に出ス

に灸する事数十壮或ハ熨葉にて前法によるべし

吐利不已

ハ建里の穴水分の穴承筋の穴承山乃

穴に灸をすべし 四穴図後にあり ○臍を遶て痛ハ開元の

穴に灸すべし 図中風の部に出ス 服薬ハ前の姜附湯

参附湯の類を用てよし

已死腹中猶有暖気

ハ臍中に塩を塡て其上に灸

又或ハ氣海の穴倶に數百壮又効なけれハ先大椎中風に図ありに灸し尚又承筋に灸すべし又灸穴あり下に図も

手足轉筋ハ塩を臍中に填て其上に灸すべし○

轉筋する所ハ王瓜後に図説ありの實を搗碎又ハ食蓼食料にするものなりを木綿に包み湯にひたして痛む所へ揉むし又其をつけてもよし○又方大蒜を研泥の様になして足のうらの土ふまずに貼付置し○服薬ハ前に同じ湧泉の穴又ハ外踝の尖

以上七壯又ハ大指の爪甲際又ハ大指の本節乃上に灸すべし（何れも詳に後に図を出せり）

吐下後渇

湯水を飲んとするハ粳米を水に入れ研く其汁を温め中へ竹瀝（竹瀝を取る法と中風にあり）姜汁を入攪てのませてよし粟黍の類何れも水に煮て汁を取服さしむべし又糯米泔温服すべし

吐瀉後

凡霍亂吐瀉ともに止る時早く粒食すべからず假令稀粥と云とも一呷も咽に入れバ

立どころに死す吐瀉やみて半日許過て饑ゑし
わとき粥清を飲しめ後に稀粥を少々与へ漸くて
に消息て軟飯を与ふべし熱湯熱酒など飲ことを堅
く無用なり病家の人は病人に飲食を勧るとの
なれども病にもよるべし霍乱後早く飲食を勧
て大成害になりし者おほし慎むべし

大陵　間使

俱に掌後に在大陵は掌後と腕との間約紋の
最中にあり此処に縦に二筋のすじあり其間に
点すべし間使は大陵の後三寸に点すべし両筋の最
中に取べし扨此寸は直に大陵の次にあり時の約文までを

量り十二半に折てを尺二寸五分
と定むる三寸を用ゆべし
此筋を目あてに量べし
掌後約紋とハ是なり
掌
てのひら
腕
此間三寸
大陵の穴也
間使の穴なり
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
半
肘の約紋とハ
此処のすぢ
をいふ
外踝尖上
の穴ハ外踝乃最中尖たる
処に点してよし
足大趾爪甲際
の穴ハ足乃大指の爪甲と肉との
間に点すべし
肉とハ爪のきハの肉なり

足の大指の本節の穴ハ足乃大指のつけきハのふしめ処に太き筋あり此処に点すべし

大都
の穴ハ足乃大指の内の方拇のはけ袮指を局まバ
約紋もしとにあるを約紋の止りに点すべし此処
骨と骨との間なり
指を局る図
此処如此骨あり骨と骨の
縫めなり約文の止点すべし
大指を少し局れバ
すじの止りよく見
ゆるなり

湧泉

此の穴ハ足心に在此穴を取にハ足の大指乃次指の際より踵の端まで紙藁にて量此ら紙三ニ折く中指乃方上より一折めに点すべし此処凹にして見へ易き処也足の指を巻きバ此穴のくぼミよくあらハれ見ゆ凹の正中の所是なり

承筋 承山 の穴ハ足の腨腸の中と云下とふあり此穴を取にハ足の膕乃中に約紋あり此最中より内踝と外踝より尖の位まで紙稲稈などに量此ゐちを十六に折て足六寸と定踝の下際より七寸上に當るハ承山なり踝の上際より七寸上に當るハ承筋なり

此圖ハ脚の側より承筋承山の二穴の
肉相の様子を記せり扨此処ハ下の跟
の方より撫揚れバ自掌の停ところ
なり
此処縦に筋あり此筋の
上へ一穴を点すべし
承筋之
承山之
七
六
五
四
三
二
一
踝の上際とハ是也
踝の下際とハ是也
霍亂
四十二

巨闕

巨闕の穴ハ臆前岐骨乃下一寸五分臍上より六寸五分の所よ在り岐骨と臍中と此間を藁みて量り八つよ折りく八寸と定たる寸法みく臍中より上六寸五分よ点をさ穴也

岐骨とハ臆の水おち此処へ如此なる骨此事なり

此骨の最中よりをるべし○岐骨の間巨闕の上よ〇此の如くなる小骨あり鳩尾と云長短人ミ同じからず又全くなきものあり脆き骨なきハ漫みなでもとむる重按へらば岐骨を摸索よれ此心含あるべし

岐骨とハ是なり

巨闕の穴是なり

臍中

水分　建里

此二穴ハ臍の上に在
前の巨闕を取如く
岐骨と臍との間を藁
にて量り八つに折
八寸と定る
く寸を用ひ臍
上一寸が水
分の穴なり
又臍上三寸
を建里の穴なり
図とひのよを見べし

己に死すといへども腹中に猶煖氣ある者ハ左の處に灸すべし

其人を覆に臥しめ両の手を伸両の肘の尖と尖の間へ縄を引其縄の下に當たる脊骨の最中より両方へひらき脊骨の両傍のきハへより付て二穴を点し灸數百壯すべし

王瓜
和名 玉づさ からすうり
ちうちこぶ きつねのまくら
人家垣墻の間或ハ原野処〻ニ在
三月苗を生し蔓ニ鬚多し葉
の状図乃ごとくにして面の色深
緑背ハ淡緑し濇て光澤なく
毛あり六七月
花を開き實を
結ぶ状上圓下
尖て長し霜を
経て熟して赤し
殻中ニ子あり形ち
螳螂の頭のごとく又
玉づさの
結びたる文のごとし故ニ玉づさと云

乾霍亂病状　忽然心下痞鞕腹肚満疼痛堪がたく漸々に煩躁擾亂吐んとして吐ず瀉さんとして瀉さず手足逆冷冷汗出胸膈くるしく起りふさがり且須刻に命危殆なり

凡霍亂ハ腹中に宿食留飲等の邪物あるゆへなれバ吐瀉あるべき筈なるを乾霍亂ハ吐瀉せざるに因て擾亂益劇なり吐ず瀉せざれバ遂に死に到る故に此證ハ吐瀉せしむる薬を

用ゆべき事なれども毛邪物の有所をしらざれバ理法を誤て害すること故に其大意を載る此説中脘に邪物閉塞てある故に吐瀉なし毛邪物上脘のところに多く聚たるあり又下脘に多く聚まるあり是を看る法ハ先手を以て病人の腹を摸索り按そる中脘より上のところ格別に緊満あるか又ハ堅き聚塊ありて按とれバ痛こしく手を近よせざるハ邪物

上のごとく多しといへ若中脘より下にあるごとに
堅き塊ありて按せバ痛ミ甚しく手を近づけ
ざるハ邪物下にある方に多しといへ邪物の在所
を見定めんとならバ先人の腹部の分界を弁
知べし胸前膈骨の正中にへ如此骨あり岐骨
といふ此骨と臍との最中を中脘といへ図の如
し

中脘ハ前の中風の條に詳なり岐骨
ハ此條の前巨闕の所に詳かなり

腹部分界図

病初の時ハ塊物の形有無在所も
見えけるゆゑその形なる故に早く

心を用てさぐるべし後には腹内一圓に膨脹して塊物の在處知ざる者あり

扨右邪物の所在を能く見定むる上にて上に在バ吐方を用ひ下にあらバ下剤を用ゆべし吐を發すべくんバ瀉も得浮せバ吐も發するを

のあり又瀉して吐らバ吐て瀉するものあ
り別に療法あり右療法如是然るに若中脘以
下に邪物ある者に誤て駿烈の吐劑を用れバ
徒に其氣ぞり升擧く但乾嘔甚しく漸く
小肚腹膨脹水漿咽に下らバ冷汗出悶亂して
死を中脘以上にゐる者を誤て下劑を施せバ
上逆之氣を進過ぐ故又悶亂し遂に元氣接
續ざして死を懼るべし此證危急なる事

風前の燭のごとし病發ハ理を失へで後よ適當の藥ありとも効なし

療法　先心下ハさゝ惡心或ハ乾嘔などし心下ふ邪物ありて按て痛むハ須至極鹹き塩湯一茶鍾を飲しめ指を咽よ挿て或ハ紙撚又ハ鳥の羽を咽よ入さ探りて邪物を吐出してよし若夫ゆても吐ざるハ再び一椀を飲しめ前のごとく探り吐せてよし○又方濃塩湯の中へ童子の小便と

生姜の絞汁を加へて攪服するもよし○又方
釅酢を微温めて飲咽を探り吐てのち炒鹽熱灰
を紙に裹胸腹を熨べし　前の食厥の條と参へ看るべし
心腹共に痛これを按バ心下中脘の邊共塊ある
ハ先塩湯ぬるくして飲て咽を探吐すべし吐ざ
後必大便も通べし若大便せざるハ檳榔子薬店にあり
二ツ童便茶碗に半分水茶碗に一杯入八分目に
煎て服さしむべし○脹満吐下せざるハ生紫蘇

を搗汁を取飲しむべし乾紫蘇ハ煮汁を飲し
然くよし○臍中へ塩を填て多灸すべし
中脘以下小腹えりけ絞るが如痛ミ是を按ハ中
脘より下腹の方に塊物ある者ハ厚朴薬店にありを
生姜の汁を付炙研末となし白湯にて二匁許を
用ゆ或ハ厚朴剉炙煎姜汁を入拌用ゆ或ハ肉桂
枳實よなり二味薬店にあり○右の諸方を用て後檳
榔子童便少加へ水にて煎じ用べし○痛強く死ん

んとなる〆巴豆薬店にあり皮を去少く炒研爛唐大黄乾姜店にあり二味共に薬の末各一匁蜜にまぜ大豆許を三ツ四ツ程煖水にて用ゆべし暫して吐下ありて愈

疔毒昏憒

疔の毒ふく氣をとり失なり

附 疔瘡 紅絲疔

病状 凡人平居無事にしく暴に死る者あり何故なる事を志るべからざるハ撚紙に火を點し死人の遍身を見るべし若小瘡あらバ是疔毒内に入たるなり（疔瘡の状委く下に記ス）面部等の顯たる所に生るハ見易き故に知易し身體手脚乃隱るる所に生じたるハみえがたきゆへ知らざる故に往々見誤る事あり又ハ其初發に憎寒壯熱

なりて傷寒と會て療理し救ハざるに至る者あり此證急に救ハざれバ半日に死す死して後も屍に紫黒の点あるべし疔毒なり故に此證緩にすべからず

療法 先小瘡の上に灸すべし疔瘡妄に灸すべからず然ども昏憒するものハ灸すべし則ち甦て後に雄黄あり薬店に一味末とし酒にて服すべし麝香あり薬店に少許加入る最よしとし ○又方甘草あり薬店に菉豆粉辰砂にあり薬店

各等分細末にして白湯にて二三匁づゝ用ゆべし
○又方蒼耳図説下にあり一握生姜三匁一ッに擣爛し
泥のごとくし生頭酒一椀ほど入和匀て絞り滓を
去て熱酒にて服し汗大に出るをよしとす○
又方藊豆と野菊花図説下にありほど擣和て熱酒に入
酔ほど飲べし疔瘡へハ蒼耳の根苗茎葉共に
焼灰となし醋或ハ米泔或ハ靛藍染家にある藍の濃水なり小
調疔の上に塗べし毒根出て愈此外塗薬附薬下の條と考べし

疔瘡の状初發ハ僅ニ粟粒計ノ小瘡ニして痛こなし或ハ衣類等ニ何物ぞと物ニ觸て忽疼痛を發する事あり或ハ惟微痒を覺るニ就て抓破とひとしく忽疼痛を發するあり然しながら尋常ノ小瘡ニ比すれバ四畔の堆核強く紫色を帶ぞ邊麻して痛も常の小瘡と自異なり其上悪寒發熱四肢沈重心悸頭疼頭眩等の證あり此證種々ノ變態定りなし疔の生ずる所も亦定なし頭面耳

鼻口目の邊弁ニ手足骨節の間惣ニ肉薄き所ニ
生ずるものなり急ニ理療せざれバ毒氣内攻し
て死ニ至るなり
療法 急ニ針ニて疔の頭の処を刺し悪血を擠し
出し又ハ人をして吮出さしむるもよし疔の処
ハ肉強く針しても痛ざるものなり 針ハ三稜針をよしとす
無とれハ物縫針さしたる跡ハ後の傳薬并ニ服
針なくもよし
薬ハ用ゆべし然し針ハ熟練なくてハ事を誤る

事あるもしれずバ如き丈ハ外科を邀て任すべし◎拳螺（圖説後にあり）の靨を焼灰にして末となし醋に和て疔の圍二三分四方を除てつけべし四畔乃堆核ある処へ塗乾バ疔の頭より黄水出て愈若疔の頭まで塗バ毒を擁て大害あり◯針を刺る鍼孔の内へハ蝸牛（圖説後にあり）殻共に搗爛泥のごとくして貼敷てよし◎又方園庭に栽たる菊花若花なき時ハ茎葉又ハ根にても

擣絞汁を溫酒に和て飲べし其滓を鍼孔乃邊に貼てよし○又方益母草圖説下にあり葉擣く塗べし○又方明礬藥店にあり三匁葱白七本擣爛七塊に分一塊を服る毎に酒一杯にて送下し衣被を厚く蓋ひ汗をとるべし若汗出ざるハ再葱白煎汁一鍾を服し少頃して汗出バ従容と蓋たる衣類を減すべし○又方豨薟草五葉草大薊三種共下に圖あり大蒜和名にんにく分擂爛て熱酒一椀を入

絞て汁を取り服そ汗出て効あり豨薟一味熟酒に調服亦よし○又方蕺菜 圖説下にあり 搗爛付てよし痛甚に最よし付る當分甚痛とも取去廻らば○又方蒲公英 圖説下にあり の白汁を取多塗てよし 此外前の疔毒昏憒の服薬互に用てよし

紅絲疔 疔瘡脚に生るハ必紅絲を引く臍に至る手に生るハ紅絲を引て胸に至り唇面口内に生たるハ紅絲ひく喉に入る臍に至り心に

至り喉ふ至る者ハ嘔逆迷悶ふなりて死ぬ故ふ
速ふ療法を用ゆべし

療法 凡手足面部等ふ黄泡或ハ紫黒色の泡を生じ夫より紅線一條引上らバ其線至り盡処より三分ほどのこし紅線の上深二三分ほど鍼を以て刺線の両方より指頭ふて悪血を擠出すべし其跡へ前の疔瘡乃傳薬を塗てよし服薬の方ハ前方を用べし

凡疔瘡に限らず手指の小瘡疥瘡の類にても生じたる時手を振て歩行すれバ其腫物よりして紅絲を引て上るときハすなハち疔瘡になれバとも右の法を以て針して悪血を出すべし

蒼耳 和名をなもみ

此草春初て苗を生じ夏に至て高さ四五尺許になる

地方によりてめなもみとも云

茎圓くして黒き班点あり

七八月のころ葉の間の枝に叉を生じ梢に實を結ぶ其實桑椹にくらぶれバ短小にして刺あり人の衣類に粘てはなれざるものなり

葉の図

實の図

豨薟

和名めなもミ
地方によりてをなもミ
と云

此草春の初に
苗を生じ夏に
至て高さ四五尺に至る

茎に毛あり

葉相對し其状ハ蒼耳ノ類にて槎牙深して薄軟なり秋に至て葉の間より枝を生じ花攅簇して黄色なり

葉の図

花の図

五葉草

和名　やひとさか　きじむしろ
やぶからし
びんぼうづる
ひさごづる

春の初苗微生じ夏に至り蔓延て原野或人家籬援乃間に多し藤ハ柔にて紫赤色に直稜あり葉ハ疎歯あり五葉づゝ茎端にあり七八月淡黄花簇り開大さ粟

粒のごとし四出なり
秋の末實を結ぶ
生ハ青く熟すれバ
紫黒色なり根ハ
白く大さ指乃
ごとくなるあり

益母

和名 めはじき

俗に にがよもぎ と云

春の初苗を生し夏に入て高さ三四尺あり葉艾に似て葉の背青し茎も方にして稜あり

此図ハ夏乃初の状なり

此図ハ春初苗を生じたる状なり

此草莖に一寸許間ありて節あり節に相對して葉を生ず四五月の頃毎節に穂を生じ紅色の花を生ず

蕺菜

和名どくだみ　十薬　ぢごくそば
入道ぐさ　ぼうぞくさ

山陰山谷濕地に在　春苗を生ず茎赤紫にして葉の形蕎麦乃葉に似て厚く面青く背紫なり茎葉ともに甚臭氣あり多く陰地に生て蘩茂するものなり

黄

花の色白し

拳螺

和名さゞゑ 又さゞい

状辛螺に似て圓り殻青白にして尾盤起り殻に尖る角數本あり靨ハ亦甚厚く堅くして圓なり高く起て凹に其肌ハ鮫皮のごとく色白し亦旋紋あり肉ハ二端ハ黒く一端ハ黄訛あり四國九州海中に產するハ状まるくして角なし然れども功用ハおなじ用ゆべし

又靨に毛あるあり佐州にてめうらちがいと云

靨の状如是薬に用処之

色ハ白くして淡緑き処あり

靨 面

色ハ茶褐なり

靨 背

野菊花

和名 のぎく

狀形芬芳全く菊の如し惟花葉共に小細なり秋の末に花を開く亦菊に似て小なり心も瓣も皆黄色なり處々野邊に生ず

○雞腸兒花も又和に野菊と呼花乃色淡紫に碧花にして絶て菊の氣なし

常の菊より葉の色淺青なり

此外野菊と称するもの二三品あり皆菊の香なし名に依て採擇るべからず

蝸牛

和名 かつむり

竹林池沼の岸に生じ雨の後最多し大小あり大なるを用べし殻あるハかつむり之殻なきハなめくじり かつむりなき時ハ代用てよし 又和名 でんぼう だいり

てうし らくむし あいく わのぐむし

蒲公英

和名 らんぽ くちちか

田野園中共に有り苗高サ三四寸春二三月の比一茎に黄花を開く小さき菊に似たる花のごとし 又白き花のものあり白さんぽといふ葉小さく萵苣のごとくなるあり又ハ状図せるごとくなるもあり茎葉とも折バ白き汁出菜として食もの是なり

くちちか きてか ちくな

又大葉の者あり高サ七八寸ばかり一尺許に至る功能小なるものと同じ

大薊

和名 やまあざミ

又 をにあざミ

苗高さ三四尺秋ハかれて冬生じ春栄て花を開花の状女子の眉拂のごとくにして淡紫色之茎に五稜あり葉ハ縮皺ありて刺多し此草大小二種あり爰に用ゆる処ハ大なる者なり

其小なるハ高さ尺餘にして葉に刺あれども皺なし大薊なきときハ代用ゆべし

脚氣衝心　もとへつたよ上るなり

病狀　凡此證最初ニ脚膝弱或ハ頑麻或ハ痠痛或ハ轉筋拘急或ハ踵跟足心等隱隱痛或ハ脛脚ニ胕腫ある等の證ありて或ハ小腹麻痺卒に嘔吐なと發し上衝強く肩にて息をなし喘息して白汗出乍寒乍熱煩悶益すゞ或ハ精神漸くに恍惚となり或ハ譫語を發し遂ニ無性となるを脚氣の衝心にて九死一生なり急に理法を施すべし

又ハ初憎寒壯熱ありて全く傷寒のごとくなる有
見誤るべからず

衝心の節に至りて病發に右の如く脚に疾あ
る事を知ざれバ理療に違ひあり病人も心付
ざ別の事と思ひ告語らざる事ハ誤る事あり
よく〳〵心を用て問べし

療法 檳榔子あり薬店に末あり二分童子の小便に
て用ゆべし生姜汁を加るも亦よし○又方呉茱

莧一匁木瓜一匁唐木瓜を用ゆべし味醂きものよし二味共薬店にあり水にて煎じ服すべし犀角薬店に屑あり鑢又ハ鮫の皮にておろすべし五六分右煎薬の内へ入攪飲最よし○又方半夏薬店にあり二匁水煎じ生姜汁多く入服すべし○又方黒豆一合水三合を一合五勺に煎じて飲べし甘草を加へ煎て服す最よし○又方鐵粉刀鍛冶の削りくづ針の鏽くづ何も用ゆべし鏽なきものをよしとす六七匁水茶碗に二杯入一杯に煎し飲べし○又方鹿角地方にありて

か此志とゆふ又志くを以ふ末となし多く白湯にて服すべし象牙とよし又牛角鯨牙皆用てよし　何も鎊又ハ鮫の皮にて屑にすべし○又方枇杷葉又ハ蜜柑の葉水にて煎じ用ゆ又牛蒡の根野菜の品なり酒に浸し飲又忍冬下に圖說あり此葉或ハ花末となし酒にて飲べし

凡人大抵氣力弱るハ常のごとくなれバ心付ねども卒爾起バ脚膝がくつきてよろ〱蹶倒或ハ脚膝足跟より小腹杯へかけて頑麻など覺

へバ早く醫師に理を請て預め衝心の患を防ぐべし何れにも前に云脚疾を覚へバ急に風市三里の穴に灸すべし或ハ先風市に灸し次に伏兎次に犢鼻次に三里次に上廉次に下廉次に絶骨の穴に灸すべし三日の間に灸するを都合百壮ばかりと屆し皆能毒氣を瀉す

以上八處の灸穴圖説下に附け出す

忍冬

和名 すいかづら 又ぼまろのかづら

此草園庭原野共にあり凡諸のかづらハ右にまとふ只此忍冬ハ左にまとふ故に左纏藤と云四月の比花を開く色白し開て二三日も経バ黄色になり黄と白と雑く開く故に金銀花と云一蒂に両花二瓣一ハ大一ハ小半邊のごとし長蘂芬芳愛べし

冬より春の初比までの葉の形如此

花の状図のごとし

莖ハ微紫ニ節ニ對して葉を生ズ葉ハ圓のごとく毛ありて澁る所を経て潤まれバ樹ニ繞て蔓延るなり一種花蕾のごとく紅なく開ハ白なるありてまた日を経れバ黄色になるされどもちくの処あり西國に有りし

夏秋の際ハ葉の状如此

左ニまとふハ如此なる故なり

八處灸穴

此灸穴の法ハ千金方といふる書よ載さるみて一家の法なり殊更伏兎乃穴杯ハ常の法とハ違り其外の穴法も皆ゝ少しの違ひあれバ必脚氣よのミ此法を用ゆべし風市の一穴ハ何れの病にも此法のごく取てよし

風市

此穴を取よハ病人を起せ身を平かにして両臂を垂手の十指を舒両の髀よ掩着て手の中指乃頭よ當髀の大筋の上よ点せ穴なり

伏兎

此穴を取るにハ先ツ人の趺を累て端坐せしめ病人乃一手、の指四本をと伸節をそろへて膝の上に置小指の側を曲る膝頭とひとしく上の人指の側の中央に点を是穴なり

是ハ一家に伏兎を脚氣にのミ用ゆべし

膝頭と小指の側と齊くもとハ如此を云なり

伏兎の穴此処に点ス

趺を累てとハ如此するを云なり

犢鼻

の穴ハ膝頭の外側よ在膝盖骨の下際乃通の外側之見ゆる所ハ平なる様ゆく指頭ゆて按視きバ両傍骨よく侠解たる様なる形ハ如是処の最中に点すべし

犢鼻の穴是なり

膝盖骨の下際とハ此処を言

膝眼

此穴ハ膝蓋骨の下両傍に陥なる処あり是最中に点すべし是穴なり二穴ずつ両脚にて四穴なり

膝眼の穴也

膝眼の穴也

三里
此穴ハ手指四本を節をそろへて伸膝頭乃骨の下際
外の方の膝眼の穴より下へ置時下にあたる小指の
傍に点すべし是穴なり
人差指
小指
膝眼是也
三里是也
病人の手なり

上廉
下廉

の二穴ハ三里の下にあり挨法ハ手の指四本を伸て三里の穴より下の方にならべ掩て下にあたる指の傍に点すべし是上廉の穴なり又上廉の穴より下の方へ又四本の指をならべ布て下にあたる指の傍へ点じ是下廉の穴なり

絶骨

此穴ハ手指四本の節をそろへて伸脚の外踝の上際に置て上の方の指の側外踝の直上に点す是穴なり

積氣暈倒 しやくおこりてめまハれ 疝氣衝逆冷氣入嚢を附も

病状 此證初發ニ頭痛身熱或ハ憎寒後ニ大ニ熱を發し小腹痛ミ作て胸と脇肋ニ引疼甚しきハ咬牙するへく反張冷汗出て流るゝがごとくおしく死なんとするあり又咬牙反張なくしく卒然ニ暈倒ものあり或ハ大小便閉るあり又積氣厥逆て心腹共ニ膨脹て背脊ニ引痛嘔吐乾嘔或ハ痰沫を吐き或ハ心胸ニ湊或ハ脇肋へ筑

て腹中刺がごとく痛或ハ遂に厥逆あがり死せん

とするものあり

療法　木香 薬店にあり 末となし熱酒にて調服す○

又方赤小豆煮汁多く服す○又方香附子 薬店にあり

末となし白湯にて服す或ハ縮砂の末甘艸 二品共に

薬店にあり 此末少し加へ服す○又方紫蘇の葉を水

にて煎じ服す急なる時ハ熱湯にて擺出し

用ゆ木香末少許を入て良○又方熊膽少許溫

水にてよく灌のましむべし熊膽偽物多きゆゑなり白盞中に浄水を汲熊膽胡麻粒大ほど浅入すれば飛旋して迅疾ものは真なり遅きとこれは偽物なり又堅炭にて火箸熱をこしらへ上に罌粟粒許を載て見るべし火乃上にて湧上り漸くに炭の内へ滲込て跡なく硫黄の香をどりするもの真なり湧揚泡さるまゝにく灰となり唯焦臭きは偽物なり又少許を舌に上へ置に苦き味舌の心へ透ることの真なり苦味唇きは偽物なり大抵是等にてよく辨知るべし○又方半夏一味煎じ服さしめてよし乾嘔するに最よし○衝逆むかうに成しハ火盆に酢を灌入て其氣を嗅しむべし○又方辰砂薬店にあり

二三分水にて用べし或ハ熊膽(くまのゐ)れを泥汁(しる)にて用ゆるも最(もつとも)よし

疝氣衝逆(せんきつきのぼせ)　素(もと)より陰嚢(いんのう)腫痛(はれいたむ)事有り又腰少腹(こししたはら)な
ど拘急(ひきつる)とも此證(このしやう)あり又左もなくして忽然(たちまち)起る
者あり其證(しやう)少腹(したはら)より胸膈(むなさき)まで衝上(つきあげ)引疼(ひきいたむ)て前(まへ)
の積氣(しやくき)と同說(おなしせつ)に見(み)えたり

療法(れうぢ)　韭(にら)を擣(つき)て汁(しる)を取(とり)て飲(のむ)○又方檳榔子(びんらうじ)薬店にあり
末(こ)を温(あたゝか)なる酒(さけ)にて服(ふく)せ○又方唐木瓜(とうもくくわ)薬店にあり

末酒にて服す○又方呉茱萸薬店にありの末を温酒にて服す○又方小茴香杏仁二味薬店にあり末にし葱白少し入温酒にて服す○又方甘草末白湯にて服す○又方衝逆強く痰咽に塞ハ香附子の末薬店に浮石ハ海より出る者用ゆべし山より出るなり焼石なり薬に入べからず薬店にあり嘗てみるに鹽の末等分にして白湯に生けなる者能用也薑の絞り汁を拌て服す○又方衝心ちし迄あるに杉乃木の節を煎じ用ゆ小木ハよろしくく

凡一尺ばかり程より以上のものよし若節なく
ば根に近き所の木の中心の赤き所を用べし

冷氣入囊

て痛強く陰囊縮入く腹急痛絶入と
するなり急しぬれハ死に至るなり

療法

山椒を木綿の袋に入て陰囊を包むべし
○又方葱の白根を刻て炒り熱き所を木綿切に
包み陰囊を蒸すべし乳香（薬店にあり）の末加る最
よし又茴香（薬店に在）炒て用るもよし○又

方白花山茶實（和に椿の字用ゆるも非なり）或ハ生にて嚼食ひ又ハ干きたるハ煎じ服てよし○又方地膚子草箒となるもの（此實なり）炒て末となし酒にて服すべし

此外服薬方ハ前の疝氣衝逆乃方と同じ参考へ用ゆべし

癲癇卒倒てんかん此病ハく俄にたおるゝ

病状　今迄無事なるに似て忽ちつと聲を發して仆者多し又聲なくして倒るゝ者あり何れも瞪目直視或ハ上竄し白沫を吐手足搐搦目瞤動或ハ偏引搖頭振身咬牙或ハ息絶脈も絶たるがごとく口閉身輭にして死人の如なる者あり然れどもながきハ一時又ハ半時短ハ暫時にして舊にもどし醒れバ夢のごとし是癲癇の證候なり

療法 先皂莢（図説中風の條にあり）煎る汁を鼻孔の内へ灌入るべし涎唾おほく出て甦若皂莢なき時ハ冷水をおほく鼻へ灌入べし

或ハ 先取嚏法を用べし（取嚏法ハ前の中風乃條にあり）或ハ石を焼酢の中へ焠て其氣を嗅しむべし勿論頭髪を掣嚏を出さしむべし○服薬ハ熊膽小豆許を白湯にてとき灌下さしむべし○又方釣藤鈎（茶店にあり）甘草一匁ヲ水にて煎じ服さしむべし○又

方白礬なり薬店に末となしあるを又挽茶五分煎じたる茶にて服すべし○又方辰砂なり薬店に二三分水にく灌下し或ハ熊膽のとき汁にて用るもよし最よし
○百會ろなり図説中風に灸すべし壮数に拘ハらず甦て止べし
皂莢汁を灌入て甦て後瀉嚏かてやまざるハ塩湯をおほくのましてよし

血厥 又鬱冒といふ

病状 人平居疾なし忽死人のごとくにて動揺せず黙々人をしらず婦人にもつとも此證多し

療法 半夏の末或ハ皂莢といふ薬店にあり猪牙皂莢と常皂乃莢乾したるもよし圖說中風の條に出スの末を鼻に吹込嚔を取醋を火盆に傾け入まて烟を鼻中に沖入しめてよし

○梅の實乃熟したる肉を口中へきり入るべし

梅實なき時ハ塩梅の肉にてもよし ○辰砂

の末湯にて五六分用てよし○又方川芎香附
子此末にあり二味茶店等分白湯にても用ゆべし

波也宇知加太

先輩青筋と云病のよし云説いのきたり穏ならざる故に俗稱を挙

病状　平居無事なりしく初ハ肩背微し痛悶を覚へ後俄に肩張痛堅満て面色青惨唇黒手足厥冷或ハ悶亂し或ハ嘿々として精神恍惚となる速に救ざれバ死る

療法　急に肩背の堅く凝たる所を小刀様の刄物にて割き破り悪血を出すべし血多く出人心付たる後に刺たる瘡へ馬糞汁を塗ておくべし

服薬 青松葉を煎じ用べし急なる時ハ青松葉を嚼く病人の口をあけく其汁を吹込のましむべし○又方刀豆の實を末にして白湯にて灌ぎのますべし急なる時ハ刮く用ゆ○又方胡椒の末温酒にて服す

○又一説あり人俄に腹疠痛漸々小胸膈へ攻く煩躁悶亂し顔色青惨或ハ黶黒唇の色黒めり昏憒して死す

療法 速に下唇を反して鍼にて刺し又ハ小刀様の物を以て割て黒血を出すべし血一合餘も出さバ忽ち愈るなり若一ヶ処割く血出ざる者ハ二ヶ所も割く血を出すをよしとす

此病海濱の漁人舟子など往々患るもの有り山陵に居る人此を患るを聞ず北國海濱にてハ此病を波伊と名づけ能其療法を知者多し他邦にハ知ざる処もありて死る人もあるよし聞及へ

ぬ異國の方書に云る沙病の中に絞腸沙なるべし

鍼暈はりして目をまはす事なり

凡人鍼して暈倒ことあり鍼の上工にもまゝあることなれども法ありて再鍼して速に甦者也至て初心の[illegible]ハ驚愕きて處置を失ふことあれバ聊か救法の大意を載のこ

療法 袖をもつて病人の口鼻を掩へバ息氣をふき回すことあり其時につき湯を與飲しむべし前法の如くして氣回ぢざるハ手の三里に鍼し

○若肩井等上部に鍼して暈倒せバ足の三里に鍼してよし

足の三里図説　前の中風に有り

手三里

此穴ハ肘の約文の上より手さきの方へ二寸に点すべし是穴なり此所を指頭にて按バ肉高く起

此穴を挨にハ腕の約文より肘の約文までの間を藁にて度り十二半に折一尺二寸半と定て此寸にて取べし

入浴暈倒 湯氣にあたるなり

人湯を浴て時を移し又ハ熱き湯に入て湯氣に中遂に眩暈して倒仆し人事をわきまへで或ハ衂血をまざることあり

療法 先冷水を顔面に噴べし或ハ惣身に水を流しかくるもよし其上にて塩水を飲しむべし又酢を一杯程のましめてよし。

中巻衂血の條考合し

酔船　船に酔○轎に酔山に酔を附

人船に乗て眩暈或ハ嘔吐或ハ瀉頭痛煩悶す

る事あり

凡船に注たる人渇ありとも水を与へ飲しむ

べからずのましむれバ死に至ることあり

療法　急に童子の小便を飲しめてよし若童便

なき時ハ自己の尿を飲べし○又方厳酢を一

口飲てよし○嘔吐止ざるハ半夏陳皮茯苓を

三味等分せんじ飲てよし○又方生蘿蔔を擦喫ふべし○又方梅肉を含てよし○又方硫黄、発燭に用ゆる いとのなり を嗅べし

○人轎に乗漸々に風雲中に坐するがごとく頭痛甚しく悪心をなす最甚ハ暈倒に至る

療法 速に熱湯の中に生姜の絞汁を入拌飲しめてよし又半夏一味煎じ服せ○又方辰砂 薬店にあり 少許舌上に置白湯にて送下 凡此證冷水を飲べからず

○人終日嶮岨なる山中を經歴するとき忽恍惚として眩暈し顔色青慘人心地なく遂に倒れて人事を知ず無性となる俗人山の神に譴なと云もの是なり

療法　速に酒を燗して醉ほど喫て平地に臥さする事一時許にして精神舊に復す○又方酢を飲て安臥しめてよし

○人の斬きたるか又ハ怪我して血多く出

たるもと傍より見く面色青くなり暈倒するもあり前の方を用て甦るなり

廣恵濟急方上巻